

土田杏村の彼方に青年たちが見た「学問的自己教育の文化」

—— 英日比較教育史のなかの自由大学運動と長野県千代村の人々 ——

岡本 洋之

(兵庫大学)

1. 序論

(1) 本研究の目的と方法

1921年春、普選下のあるべき有権者像を考えていた長野県小県郡の蚕種農業青年・山越脩蔵(1894-1990)は、自分たちが開設した哲学講習会の講師・土田杏村(1891-1934)に対し、文化科学講座を開く恒常的組織の創設を提案した。これが同年秋に、成人向け教養教育機関・信濃自由大学(のち上田自由大学)として上田市で発足する(山野 1981, pp.106-108)。以後、自由大学運動は同県内外に広がる。

資本主義下の経済的搾取を憂慮して「十分に人間性を発揮した、完全に自由な、同胞的共同社会生活」の建設を理想とし、プロレタリアートがそれを実現すると考えた土田は、英国において労働者への教養教育を批判していたポール夫妻(Maurice Eden Paul, 1865-1944 ; Cedar Paul, ?-1972)の著書 *Proletcult (Proletarian Culture)* を読み、同書が夫妻の社会主義思想宣伝にすぎないことを批判する。彼は、宗教、文芸、哲学等の一般的教養という「もつと深いところから人間性の睡夢を喚び醒す」プロレットカルトを対置し(土田杏村 1924, pp.284-285)、それを自由大学の教育内容とした。つまり土田は、教養教育への批判者を批判することを通じて、教養教育機関の構想を練ったのである。

この自由大学運動は、約10年間しか続かず、失望した土田は教育による社会変革に見切りをつけてしまう(山口 2004, p.203)。そこで本研究は、なぜこの運動が当初の目的を果たせなかったのか、とくになぜ土田は英国の教養教育機関から直接に学ばなかったのか、という問いから出発する。そして英国におけるポール夫妻および夫妻が批判した労働者への教養教育機関と、日本における土田を比較するという、英日比較教育史研究の方法を採ることにより、日本の農業恐慌やファシズムにとどまらない自由大学運動衰退の内的原因(主因)を探る。また本研究は、自由大学に関わった青年たちの、土田を超えた動きをも合わせて明らかにする。

(2) 先行研究の検討

① ポール夫妻と土田に関する先行研究

ポール夫妻のうち夫のM・イードン(以下、「イードン」と略す)は医師、妻シーダーは音楽家

をそれぞれ出身職業とする共産主義思想家であり、夫妻は共著書と、独仏伊露の各語の共英訳書を多数出した¹。現代英国では、夫妻の原著書はほとんど顧みられず、研究としては、英国へのロシア文化伝達例として夫妻を採り上げた Ayers (2018) がある程度である。上木 (1982)、中野 (1990)、山口 (2004) 等、土田と自由大学運動に関する先行研究も、夫妻についてはほぼ名前を記すのみである。夫妻の言動に関する日本語での研究は、現在はイードンを採り上げた岡本 (2007) のみであろう。

② 英国労働者教育史に関する先行研究、および本研究の位置

ここで英国労働者教育の研究史を見よう。松塚俊三によると、英国では旧来、労働者らが自ら学ぶ行為は self-education (自己教育) と呼ばれたが、その具体的有様は、なかなか研究されなかった。しかし 1984 年に John Burnett (J・バーネット、1925-2006) や David Vincent (D・ヴィンセント、1949-) が労働者階級の悉皆的自伝調査を公刊した後、これを分析した Jonathan Rose (J・ローズ、1952-) は、読み書き能力を得た労働者たちが autodidacts (自分自身を教える人) となり、「あれこれの知識の断片ではなく、生きていくのに必要な知恵や態度、文化」を苦労して得たことを解明した。ローズはこれを、self-education の枠に収まらぬ cultural literacy (文化的識字) と呼んだ。

松塚は、ローズの研究対象たる 1790 年代から第 2 次大戦にかけての時代に、英国の労働者階級が、「ただひとり学ぶだけでなく、周囲の環境に積極的に働きかけるきわめて能動的、主体的な行為」、すなわち「他人の助力を請い、ネットワークを築き、さまざまな困難と闘う、他の時代にはない特殊性を有していたことに注目する (以上、松塚 2006, pp.269-271。傍点は岡本、以下同じ)。そこで松塚は安原義仁とともに、この個性的時期を表現するキー概念として autodidact culture を強調する。

autodidact は通常「独学者」と訳され、両氏も autodidact culture を「独学の文化」と訳す際にネットワーク構築と知識共有が前提だと明確に説明しているので、英国教育史研究上で問題は生じまい。しかし日本が関係する研究でこの訳語を使うと混乱が生じる。autodidact には人数に関する語義がないので、複数の autodidacts が集まって知を共有する様子を autodidact culture と呼ぶのは適切であるが、日本語の「独学」は「先生につかず、ひとりで勉強すること」(西尾他編 1986, p.800) なので、日本語でいう「独学者」たちが知を共有しようと議論する様子を「独学」とは呼ばないからである。

それゆえ英日比較教育史の一研究である本稿は、autodidact culture を「独学の文化」と訳す点だけは敬して遠ざける。そして、autodidact が「自己を教育する」という意味であることと、それが後述する如く討論を通じて真実に接近するなどの、知を拓く学問的要素を有することから、autodidact culture を「学問的自己教育の文化」と表現する²。

英国で学問的自己教育の文化を担った代表的組織は、労働者への教養教育を展開した The Workers' Educational Association (労働者教育協会、WEA) である。土田は、日本で教養教育機関たる自由大学の充実を期したにも拘らず、WEA に論及せず、WEA を批判したポール夫妻への批判を通じ、夫妻とは異なるプロレットカルト論を展開した。病弱ゆえ生き急ぐように著述に

集中した土田が、何故かく迂遠な仕事をしたのか？この疑問を頭に置き、夫妻の思想から本論を始める。

2. ポール夫妻の問題点——労働者へのリスペクトの欠如

WEAの特徴は、第1に、基礎教育後の教育として、主としてliberal education（教養教育）とgeneral education（一般教育）を提供しようとしたことであり、第2に、各種の労働者組織と大学とを、教育の下に一つの組織にまとめたことである（土井 2013, p.17）。

しかし被搾取の労働者階級側に徹底して立つポール夫妻の*Proletcult*は、このWEAに反対した。

WEAのチュートリアル・クラスに集う男女労働者は、まず何よりも、経済学および産業史等の科目を教えてもらいたがっている。彼らは、自分たちを雇っている間、自分たちを椅子に鎖で繋ぎ、奴隷としてガレー船を漕がせ、いったん解雇したら、鎖を解いて自分たちを海に投げ捨て、あとは風波にもまれつつ口に糊せねばならない状態にしてしまう、社会のしくみの特質を理解したいのだ。[中略] そしてそれが天然現象のようにいつも存在したわけではないということを学んだ暁には、彼らは、「社会」の秩序の必要条件を満たすには明らかに効率が悪いしくみを、労働者階級が革命的に変える結果をもたらす、その手段を掴み取ることを欲する。だがそのようなことを、社会的連帯と階級協調を叫ぶ「偏りのない」解説者から学べるはずがない。また彼らは、真に階級意識を身につけ、労働者階級としての考え方ができるようになり、自分たち自身の文化に到達するまでは、Nor will they learn it for themselves...（自力でそれを学ぶこともまたしない）。

(Paul 1921, p.12)

資本主義社会への憤りに満ちたこの文は、労働者は真に階級意識を身につけ、自分たち自身の文化に到達するまでは、社会のしくみを「革命的に変える結果をもたらす、その手段」を自力で学ぶことはないともいう。ここから、労働者は、革命に立ち上がる能力を、仲間うちでの読書や議論のみによってでは修得できず、あくまで指導者の下で学ばねばならないとする夫妻の考えがわかる。革命という多数の力を結集すべき事業を教育の目標にすることを前提とすれば、また今日想像しがたい労働現場の惨状と、*Proletcult* 出版のわずか4年前にロシア革命が起こった時代背景を思えば、この考えをも無下には否定できまい。ただ問題は、このような立場に立つポール夫妻ら指導者が、革命に直接繋がらない内容を学びたいと望む労働者をどのような眼差しで見たのか、である。

20世紀初頭の英国には、成人労働者の8分の1ないし5分の1の少数派ながらも、「知的興奮に満ちた読書の体験を通じ」革命に直結せぬ新しい世界を発見した「知的な労働者」たちがいた。安全ランプのほのかな灯りのもと、暗い坑内で、煤のため読めなくなるまでシェークスピア全集を読みこんだ、グレートブリテン炭鉱労組書記長Frank Hodges (F・ホッジス、1887-1947)、また多くの出版物が労働者や下層民を、頭脳をもたぬかの如く描いていた1920年代に、WEAのチ

ユートリアル・クラスにおいて、暗く貧しく悲劇的な人生を送った労働者階級の一少女を「興味深い性格と思想、人格をもった」人物として描いたトマス・ハーディの『テス』に出会い、人間存在の普遍的価値を発見したパン屋の娘 Edith Hall (E・ホール、1908年生) らがそれである(以上、松塚 2006, pp.270, 284-285)。

だがかかる労働者の姿は、ポール夫妻の眼中にはない。「シェークスピアやギリシア芸術について講義せよと求めるのではなく、現代社会生活のメカニズムに関する情報を求める労働者こそが、労働者階級と雇用者階級の間に相容れるものは何もないという事実を、いずれにせよ確かに理解しつつある」という言葉 (Paul 1921, p.13) から読みとれるのは、労働者がシェークスピアやギリシア芸術を学んでいるようでは、彼らは自らを搾取する制度をいつまでも廃止できないという見解である。

ここから夫妻は、労働者階級への教育は、資本主義社会を搾取なき社会に移行させるという目的をもつゆえ、それにふさわしい tendency (偏向) こそが必要であり³、目的達成のためには学びの内容を単純化し、革命に繋がるものに集中させ、それ以外は捨てよと主張する (*Ibid.* p.14)。

しかし指導者がこのように、唯一の見地 (ここではマルクス主義理論) に沿った学びのみを高く評価すると、シェークスピアやギリシア芸術を含め、多様な内容を自由に学びたいと欲する労働者へのリスペクトは、必然的に失われる。それを見抜く労働者の心眼は鋭い。WEA の一受講者、Lavena Saltonstall (L・ソルトンストール) は、ポール夫妻と同じく WEA を労働者懐柔機関だと非難した者に対し、「ギリシア芸術は、労働者が自分たちの世を要求することをけっして妨げない。実際にはそれは、労働者がこれまでいかに不自由な生活をさせられてきたかを悟るのを助けてくれる。[中略] 彼ら [WEA への批判者と、その批判の形成者ら] は労働者階級の知性を侮辱している」と反論した (Rose 2010, p.267)。彼女は社会主義的方向性に好意的でありながらも、労働者への教養教育無用論を痛罵し、指導者のあり方を厳しく問うている。

ポール夫妻が労働者への教養教育を非難する根底には、階級社会における優れた文化を、被支配階級を働かせて時間的・経済的余裕を手にした、支配階級の余暇の産物とみて pseudo-culture (偽文化) と呼び憎む考えがある⁴。夫妻は、文化を進歩させようとする欲望と、高度な文化を楽しむ能力が、一部の人人々に独占されてきた不当性を憎むあまり、文化遺産の生産者が主として奴隷や下層民衆⁵であることを見ていない。これでは夫妻と同時代を生きる下層民衆へのリスペクトも生まれない。

このようにポール夫妻は、労働者階級への経済的搾取の廃止を徹底して追求したが、その眼差しは、同時代と過去における個々の被搾取者へのリスペクトをおしなべて欠いていた。程度は異なるものの、この傾向が土田にも共通していることを次に見よう。話を日本に移す。

3. 土田の自己変革とその問題点

(1) 臨死体験を伴った自己変革——すべての存在に絶対的価値を認めるまで

1912年、絶えず読書と瞑想で学んでいた20歳代初めの土田は、日々成長する生き方に価値を置くあまり、たとえば長々と雑談を楽しむ青年らを軽蔑した (土田杏村 1996, p.145)。また東京高

師在学中の14年に書いた「三崎日記」では、路傍の貧民を「絶えず何物にか警戒し、絶えず何程かの緊張を意識し、休むことなく圧迫を感じ、悲惨を味はつて居るために、彼等の表情は兎の如く怯懦に、蛇の如く奸佞 [かんねい、心が曲がっていて悪賢く、人にこびへつらうこと]」だと描き、自分は芸術と無縁な彼らとは距離をおき「美はしき貴公子の如き気品」を保とうと決意した(同 1920, pp.118-119)。

しかし土田のこの姿勢は、一方で彼の志である「弱ヲ扶ケ強ヲクジクハ男子ノ本領也」(上木 1982, p.29)との矛盾を広げた(山口 2004, pp.66-70)。社会の「弱」たる貧民(土田は「彼の人達」と呼んだ)が、「文明の高等批評家」たる自分を仲間として受け容れてくれないことと、「彼の人達の生活に私の評論が力を与へ光明を与へるまでは、私の評論はまだ甚しく小さい」ことに苦悩した土田は、1915年5月、雨天のなか「彼の人達」との接触を求めて終日東京を彷徨して何も得られず、帰宅して「濡れた着物のままテエブルの上に泣き崩れて了つた」(以上、土田杏村 1935a, pp.68-69, 71)。

以後土田は高熱を伴う湿性肋膜炎に苦しみ、生死の境をさまよう。幸いにして快方に向かった彼は、病床で次のように決意する。「彼の人達と全く絶縁して静寂と孤独の中に私の生命を愛育しようとした私の行為は全然誤謬である。自分の病気が治つたなら出来るだけ早く私は彼の人達の仲間に加はらねばならない。[中略] 私は志士の襟懐と労働者の熱意とを^{ママ}平行 [並行] して、私の評論の背景に彼の人達の生活の空気を充滿せねばならない。[中略] ただ彼の人達の真直中へ。そして私の手には鋤と玄能と剣と十字架とを持つて」(同書 p.73)。

山口和宏は、この大患を「杏村の思想的な転回点」とする(山口 2004, p.71)。しかし大患後に土田が「鋤と玄能と剣と十字架」、つまり「彼の人達」とともに歩むための武器である「学問と学問に裏づけられた評論」(同書 p.74)を徹底的に修得しようと京都帝大に入学し、西田幾多郎に師事しはじめて5年近くたった1920年7月、彼は、貧民を軽蔑した上の「三崎日記」を『靈魂の彼岸』に収録のうえ上梓している。したがって土田は京都移住後も、大患以前の高慢な思想と簡単に決別できずにそれと日々闘い、助けを求めようとかつての自分の姿を公にしたと見られる。

土田が社会改造原理たる華嚴経教理を掴んだことも、彼が以前の思想と闘った戦果であろう。臨死体験で美しい光景を見た土田は、これを宗教的法悦と感じて仏教関係書中にその体験の意味を探し、華嚴経に到達した。山口によると「華嚴経ではあらゆるものが光り輝く世界の中であらゆる花によって飾られた無限大の仏が描かれ、しかも『それぞれのなかにすべてがあり(一即多)、すべてのなかにそれぞれがある(多即一)』という思想によって、すべての存在が意味づけられている」(同書 p.82)。

土田はこれをもとにして「華嚴象徴の世界観」をつくりあげる。ここでは山口の教示に基づき、この世界観が現実的生活に投げかけている重要な点のみを掲げる。

今私たちが生活する現実世界は、厳粛なる唯一の世界である(土田杏村 1935b, p.61-62)。そこにあるすべてのものは「何物も自己自身を以ては、その在るが如き表現をなすことが出来ず、すべては他のすべてのものに支へられつつ、その在るが如き表現」をなす(同書 p.120)。桜花と雑草の花はそれぞれ独得の美をもつが、それぞれの美が異なるからこそ相互に引き立て合う。さらには桜花、雑草の花、蘆の一葉のそよぎ、天体運行のいずれも、宇宙全体の動きが各々に映

じたものであり、各々の動きはまた全体に映じている。それゆえ、あらゆる存在はかけがえなき絶対的価値をもつ。

ここから導かれる理想的社会は、全個人が「個性を、許された天稟〔てんぴん、生まれつきの才能〕の俤に伸長させ、その個性に最適の地位を占めつつ、社会生活の共同を達する」場である（土田杏村、1935c, p.240）。以上の考察を基盤として、土田はポール夫妻のプロレットカルト論を受け取った。

(2) 不十分であった民衆へのリスペクト——思いやり深い人格者にはなったが

かく土田は生命をかけた自己変革を経て、世界観とあるべき社会像を構築した。その結果彼は、民衆に腰低く接するようになった。土田の子息は回想する。「外出に主として俵を使ってゐた父は、俵曳きが自分よりも老人であつたりすると、すっかり気毒がって、乗つてゐても乗つてゐる気がしないといひ、時には、俵を降りて俵曳きと一緒に歩いて行つた。また、訪問のために門前で俵を待たせておくことが何うしても出来ず、それだけの賃金を払つてゐても、金銭によって人の自由を拘束することに堪へきれず、用件を中途半端に切上げて出て来るのが常であつた」（土田隆 1991, p. 114）。

しかし土田のこの成熟ぶりも、彼よりはるかに上の世代の中村正直（1832-91）が「農者には農事を問ひ、大工左官には大工左官の事を問ひ、其の談ずる所は、皆これ学問上のことのみにして、曾て空談にわたりしこと無し。〔中略〕自ら碩学宿儒たるの身を忘れ、謙虚好問、智識を吸収して已ま」なかつた逸話（石井民司 1907, p.125）、つまり農民や大工・左官職人をリスペクトし、彼らから仕事上の知恵を聴き会話を楽しんだことと比べると、ついに民衆に対しては思いやりを示すに留まり、リスペクトを通した深い対等関係を築けなかつた土田の限界が浮かび上がる。これは教育実践でも同様である。

土田は、荒削りの才能を示す人が自分に近づくと、喜んでその能力を育てた。再び子息の回顧から拾う。「或る夏の日〔中略〕僕はすっかり退屈になって、でたらめな文句を口に出してつぶやきはじめた。黙つてきいてゐた父は、そのなかに偶然一つのリズムを発見したものと見へる。彼は面白がって今の言葉を書きとめて置くやうにいった。僕は父に讃められたのが嬉しくこんなものならいくらでもできると自慢した。それから、父と僕との童謡の共同創作が始るやうになつた」（土田隆 1991, p.115）。土田はまた、自分の文章への異論を一青年が送つてきたのを喜び、彼の詩集出版に奔走し、上洛して語学を修めるよう勧めた（渋谷 1991）。この渋谷定輔（1905-89）は後に詩人として大成する。

一方で土田は、才能を示さぬ人に自分から近づいて、隠れた能力を引き出すには至らなかつた。民衆のインテリ層が集う自由大学においてさえ、彼は受講者に講義を聴かせるだけの実践に疑問を呈さず、討論や小論文作成等、受講者の能力を引き出す工夫を提案しなかつた（次章参照）。1924年に上田自由大学の受講者が減少しても、彼は宣伝活動強化を指示するだけであつた（山野 1981, p.125）。

このように民衆へのリスペクトについては、ポール夫妻がこれを欠いていたのに対し、土田は有してはいたけれども、それはあくまで民衆が才能の萌芽を示して自分に近づいてくる場合に限

られた。

4. 英国の教育情報を受信しそこなった土田 —— WEA年報から学ばなかったゆえに生じた損失

(1) 教育の目的をあくまで階級闘争におく土田——彼がWEAを評価しなかった理由

土田は、資本主義国家が社会主義革命を経て無産者独裁国家になった暁にも、「人間の性能の根本に潜む利己主義」や「他を支配する事に悦楽を見出す英雄主義」が人間に残るため（土田杏村 1924, p.316）、無産者独裁国家が「永久の社会的政治的形式」となり、国家形式なき共産主義社会は実現しないと述べる（同書 pp.304-305）。それゆえ、利己主義や英雄主義をもつ社会主義国の権力者から教育の自由を守る運動が必要になる（同書 pp.317-320）と考えた彼は、次のようにいう。「教育が社会主義的に行はれるのは正しく無い。もう一つ言ひ換へれば、社会主義は正しく無い。我々は理想主義を取らなければならぬ。其の理想主義の基礎に立つて〔深い一般的教養から人間性の睡夢を喚び醒ます〕プロレットカルトの方法が行はれなければならぬ」（同書 pp. 219-220）。

マルクス主義を消化してなおそれに満足せず、全個人が個性を开花する社会をどこまでも追求した土田が、経済的搾取と、階級闘争色なき教育を許さなかったのは、理想主義の立場からであった。大学拡張運動に対して彼は、「労働者はカルチュアの性質を全然ブルジョアジイの其れと異らしめやう〔よう〕とするのですから、此んな中途半端のもので満足出来る筈がない」、「愚」（以上、同書 p.209）と手厳しいうえ、「今は其の運動は世界的に隆昌のものとなつて居ない」（p.300）とまでいう。それゆえ彼は、英国で、ほかならぬ教養教育機関のWEAが「オックスフォード大学と連携することで、イングランドの伝統的な大学教育により近い、学術的にもより高いレベルの教育機会を労働者階級の人々に提供」していた事実（土井 2013, p.26）を直視しなかった。それを次に見よう。

(2) 自ら手にしたWEA年報から学ばなかった土田

土田が1924年2月に出版した書の注に「W. E. A. Year Book, 1918, p.372」と記したこと（土田杏村 1924, p.201）は、彼が遅くとも23年末ころには、1918年版WEA年報（Cole, et al. (Eds.) 1918）を手にし、注記が示すG・D・H・コール稿（Cole, 1918）を読んだことを示す。ところが同年報には、土田が自由大学運営の参考にできたはずの、WEA講座の理念と実践も、下記の如く詳述されている。

チュートリアル・クラス（以下、「クラス」と略す）に関する中央共同助言委員会書記補佐W・ピートンは、クラスにおけるessay work（小論文作成）の重視に触れている。「クラスは1科目が3年連続で開講され、『開講科目の制限範囲内において、大学における優等と同水準を目指さねばならない』。記録によるとクラス開設運動初期のころ、受講者の学力水準を疑っていた歴史学の一大学教授は、優秀作として選ばれたわけでもない受講者の小論文の山を前にして、抱いていた疑念を忘れただけでなく、その大半が大学の優等学生に当たる価値をもつと声明するまでにな

った」(Beaton 1918, p.256)。

ビートンはこうもいう。「小論文作成においては、好ましい水準に達しなければならないのだが、チューターは各受講者に対し自由裁量をもって接する。その理由は、開講時に受講者はいかなる種類の小論文を書いた経験もないかもしれず、彼が自分の考えを紙の上に表現する初歩の方法をさえゆつくりと指導されることになるかもしれない、ということが忘れられてはならないからだ」(Ibid. p.257)。初心者に対してさえも、高水準の内容を含む作品を書くよう指導するWEAの方針が示されている。

同年報には、社会科学系クラスの一女性受講者の手記も収められている。それによると連続2時間の授業のうち、後半に行われた討論と、小論文作成は、印象深いものであった。

時には討論の時間中に、古臭い立場の考えが激しく批判されておおかたやり込められてしまう場合、受講者たちは一時的に、論争に勝とうと闘争心を燃やすかもしれない。だが当然ながら討論は、問題の真実に近づくために行われるのであり、このことは十分に視野に入っている。時々、臆病な受講者がたいへんおずおずと質問したり、意見を表明したりすることがあるが、その際にはチューターが(共感的に理解する才能を有していれば、ではあるが)、「そうですね、君の言いたいポイントはこれこれでしょう」と述べ、ほとんど理解しがたい発言の根底に本当にある考えを汲み取り、他の受講者たちに示す。ある級友は、工場内で私と同じく厳しい体験をしていたが、その人の言葉は、私が講義で得たことを、まったく新しい視点に引き入れてくれたものだ。[中略]

さらに、小論文作成がある。これは、30歳や40歳の人にとっては、12~13歳のころ以来「作文」なるものをしたことがないため、かなりの困難を伴う。小論文を書こうとしても、そのもとになる資料を改ざんするわけにはいかないもので、論旨をうまく組み立てられないことが頻繁にある。受講者は、チューターから「君は木を見て森を見ていない」と言われるが、それに驚くことも、それを苦痛に感じることもない。私たちの中には真の意味で賞賛に値する小論文を書くには至らない人もいるが、作成に真剣に取り組む人は皆やがて、特定の集団でしか通じない言葉を使ったり、理由を明らかにせずに主張したりすることの愚かさ、自分が賛成しない主張をも理解することを学ぶ。(Scruton 1918, p.262)

ここには、優れたチューターが受講者から考えを引き出す様子や、たとえ優秀な小論文を作れずとも、作成過程を通し「特定の集団でしか通じない言葉を使ったり、理由を明らかにせずに主張したりすることの愚かさ、自分が賛成しない主張をも理解すること」を学べるという貴重な指摘がある。

この年報を土田が手にしたのが、遅くとも1923年末であることと、前述の如く彼が自由大学受講者激減対策として、宣伝活動の強化しか言えなかったのが翌24年であることを考えると、彼は年報を手にした時に、自分が共感する、教育と政治理論宣伝の峻別を説くコール稿は読んでも、自由大学を運営するうえでの重要な指摘を含む上記2稿からは学び取れなかったと見られる。それは、土田の民衆へのリスペクトが弱く、彼が受講者から能力を引き出す方法に強い関心をも

たなかったゆえに、自分が反対する大学拡張運動体であるWEAの実践に学ぼうとしなかったからであろう。残念である。

こうして土田が、WEAにおける討論と小論文作成を通じ、学問的自己教育をしつつある労働者の存在を知る機会を逃した結果、彼自身は英国の労働者の様子を学んで民衆に対する自分のリスペクトを強固にする機会を失うとともに、自由大学運動は衰退が確実になったと考えられる。

5. 土田を超えた千代村の青年たち ——「学問的自己教育の文化」の概要を掴む

(1) 伊那自由大学千代村支部の創立

上田自由大学が衰退しつつあった1924年1月、長野県南部の下伊那郡飯田町（現・飯田市）では、受講者73名を得て信南自由大学（のち伊那自由大学）が開講し、山本宣治「人生生物学」、タカラ・テル「文学論」、水谷長三郎「唯物史観研究」、新明正道「社会学概論」の講座が各5日間行われた。

新明の講座終了3日後の3月17日に官憲は、郡下各町村の青年会に影響を与えていた、社会主義志向の政治団体・長野県自由青年聯盟（会員数約200）の幹部組織であるLYLを急襲し、26名を治安警察法違反で検挙した（LYL事件）。自由大学は、政治とは一線を画していたが、自由青年聯盟から支持されており、事件後は10月に県警察部が特別高等警察課を設置したほか、郡内青年会活動で反社会主義勢力が伸びたため、自由大学運動の環境は悪化した。それでも同年秋から1926年末までの約2年間に、1回につき4～5日間の講座が10回開かれ、最大で26名の受講者を得た（山野 1981, pp.120-134）のは、快挙であろう。ただ受講者減少傾向は明らかで、27年ころには十名程度になった。

これを憂えていたなかに、千代村（現・飯田市千代）の青年たちがいた。ここで同村の地域性を見るため、時期はさかのぼるが、村内に組織されていた千代青年会に話を移す。男子から成る官製青年会（団）は、日露戦後の地方改良の一環として、地方自治体補強のため各地で組織され、青年を管理する色彩が強く、会長も多くは老・壮年が務めた。それは1911年創立の同青年会でも同様であった。

しかし1914年に第1次大戦が始まると下伊那郡は、軽工業地帯化が進み、小学校教育を受けた工場労働者が流入して「デモクラシイの思想」が盛んとなり、労働・普選運動の一大中心地となった。加えて同年に着任した千代小学校長・熊谷春次郎が力説した「青年の団結と自治心の涵養」に刺激された千代青年会員の青年らは、会の自主化＝自治的運営権獲得闘争を開始し、19年春には役員を会員青年から会内投票で選ぶこと、秋には会員の年齢上限を25歳とすることを総会議決で勝ち取った。

村当局もこの動きを支持し、翌1920年には青年会が運営する村の小規模な文庫における書籍購入予算が、10倍に増やされた。また青年会は社会問題を学ぶため、読書会を月1回開くことにした。

1924年には、青年会と村当局・処女会・学校職員が共同運営する村立図書館が創られた。青

年会の代表委員会は26年3月、「イ、各支会図書館委員を一名選出す。／ロ、委員は毎月廿一日図書館に出頭し、図書館の交換を為し支会に配本する事」を議決した（以上、清水編 1934, pp. 4-11, 39, 50, 82, 110, 他）。分館間で蔵書を定期的に交換し、利用者に豊富な情報を提供するこの方法は、itinerating libraries または travelling libraries（巡回文庫）と呼ばれるものであり、英国では19世紀初期に見られ（Brown 1856, etc.）、同世紀後期に大学拡張の一環として発達し、それが米国経由で日本に輸入されたものである（石井敦編 1981, p.117, 他）。千代村の図書館史には、かく英日間の教育思想の流れが生きている。

話を戻す。伊那自由大学再興を図った千代村の青年たちは、翌1927年10月に大学の千代村支部を創る（羽生他 1979, p.17）。その趣旨書は、まず現在の自分たち農民は、「最も低い〔低い〕意味の居食住〔衣食住〕」を幾世代にも渡って繰り返しているだけだとしたうえ、「晴れたる蒼空の下で自らの生活に意義を感じ健康なる百姓として快活に働き得る理想社会」の実現のために、絶対に必要なのに果たされなかった最大のことがらは「自我教育の大業」だと断定する。趣旨書は次に自由大学で、「講座の度毎に吾々は吾々の無智に戦慄し新に展開する視野に驚異の眼を開き何とも知れない腹底の力を受けて帰った」と、新しい知に触れた喜びを表す。しかし青年たちは、それだけでは満足しなかった。

自由大学の斯の如き特質を吾々が理解すればするだけ深い物足りなさが吾々をおそった。それは自由大学がもっと徹底的に普遍化されねばならない事を感じたからである。例へば千代村の青年会員が昼間の労働の傍ら斯の如き自我教育の時間を持たなければ駄目だと云ふよう〔やう〕な考へ方が吾々の心を動かしたのである〔中略〕吾々は此の冬より毎年一ヶ月間の講座を経済学 社会学 哲学 生理学 文学等々数ヶ年に亘って計画をたて総合大学的な教育組織を作る、これ以外に自由大学の講師の来伊を機として講演会講習会を開く。又吾々の仕事と最も密接不可離な関係にある補習学校、図書館等の理想的改革に努力する。又一月一回研究会を開いて社会現象の批判解剖を試み自らの啓蒙に努めよう。この研究会には臆〔やが〕て二三年の後には経済学社会学等専門的〔専門的〕な研究を発表する会員の出て来るのを吾々は期待してゐる。或いは又千代村の経済統計などが作られ現実的な生産関係に裨益〔裨益〕する事も出来なければならない。斯の如き集団が出来てこそ初めて吾々の正しき生活が指示される事を吾々は信ずる。（以上、山野編著 1973, pp.127-128）

すでに千代青年会は、処女会とともに村立図書館運営に関わり、この趣旨書も図書館改革に言及している。それを含めここに書かれた壮大な計画を、青年会による定期的読書会開催と考え合わせると、千代村の青年たちは、本格的な学問的自己教育を模索しはじめている。一方で土田は図書館を論じず、自由大学を図書館利用と直結した学びの場と見なかった。青年たちの動きは土田の想定を超えている。

しかし支部創立の1927年には、繭価が前年よりもかなり下がり、30～31年に日本は昭和農業恐慌を迎える。かく経済状態が悪いなかでも、恐慌に入るまでは、自由大学千代村支部は果敢に活動した。28年12月には自由大学下条支部と合同でタカクラ・テル「日本民族史」、29年2月に

は同・竜峡支部と合同で三木清「経済学の哲学的基礎」、12月には藤田喜作「農村社会について」とタカクラ「日本民族史研究」の、それぞれ3～4日間にわたる講座が行われた（山野 1981, pp.136-138）。

(2) 英国流「学問的自己教育の文化」具体化への肉薄

自由大学運動の指導者である土田は、受講者の学問的自己教育を考えなかった。しかしそれでも千代村の青年たちは、この種の教育を志向し続けた。それを、自由大学同村支部設置の翌々年であり、支部講座最後の年となった1929年に出された、同村の一青年の文章から探ろう。

楯章「自由大学とは何か」は、自由大学での学びを生かす方法を次の如く述べる。「自由大学に於ては講座のみが、自由大学精神ではない、即ち一科目の講座に依り概念を取返し、その理念を根源として、自己の教化を進展せしめ、獲取したる学問的原理を利用して〔中略〕現実的な人類既成社会の現象を解剖批判する知識を得るを持つて〔以て〕、モットウとし、その批判した結果を自己の修得されし本質的理念に依り、より良き理想郷の建設へと進展す可きである。これが為研究会を催し此の研究会により社会問題を理解する一段階とも見る可〔き〕である様に考へる」（楯 1929, p.22）。

この文は、受講者は自由大学の講義で得た「概念」を入口として「自己の教化」を進め、そこで得る「学問的原理」を用いて、理想郷建設に向け現実社会を分析するのだと読める。受講者は「自己の教化」をする人、英訳すればautodidactsであり、楯はその人々が研究会で知識を共有する姿を脳裏に描いている。この共有作業は「知識の断片ではなく、生きていくのに必要な知恵や態度、文化」を共同で掴むという意味の、ローズがいう cultural literacy（文化的識字）である。楯は、土田が掴みそこねたWEA流の autodidact culture（学問的自己教育の文化）を、まだ大要ではあるが掴んでいる。

受講者が、この学問的自己教育の文化を具体化するためには、自由大学講師は講義内容に関する問いを受講者に表明させ、その解決を期して討論や小論文作成をさせるべきであった。問いを適切な形に作るには相当の訓練を要するので、その指導も講師の任となろう。しかし楯が、支部設立の翌々年に、趣旨書に謳われていたのと同じ研究会開催の句をまだ繰り返していることは、研究会活動が進まぬ理由もわからない苦悩の表れと見るべきであろう。彼らは、問いを設定したうえで自由な議論・論述をするという学問の具体的方法が、わからなかったと見られる。

かく長野県千代村の青年たちは、指導者を超え自力で、英国流学問的自己教育の文化を具体化する一歩手前にまで迫った。このことは、教育発展史の一里塚として記憶に留められるべきであろう。

6. 結論

本研究においては、自由大学運動とその指導者・土田杏村について、なぜこの運動が当初の目的を果たせなかったのか、とくになぜ土田は英国の教養教育機関から直接に学ばなかったのか、という問いを立て、それを英日比較教育史研究の方法で検討した。

土田は、生命をかけた自己変革を通し、「十分に人間性を発揮した、完全に自由な、同胞的共同社会生活」を、一般的教養という「深いところから人間性の睡夢を喚び醒す」ことにより建設しようとした。その立場から彼は、一方では社会主義思想の宣伝に注力して教養教育に反対するポール夫妻を批判し、他方では教養教育機関のWEAを資本主義社会容認の立場に立つと見て批判した。

加えて土田自身は、民衆をリスペクトする姿勢が十分でなかったゆえに、民衆から能力を引き出すことに関心をもたなかった。このため彼は、自由な討論と小論文作成を通じて労働者の能力を引き出す理念と実践を記したWEA年報を、手にしたにもかかわらず、そこから学問的自己教育の文化を学び取らなかった。その結果自由大学では講義だけが続けられ、それが大学衰退の主因となる。

しかし、そのころ青年会自主化を勝ち取り、自由大学で知の刺激を受けた長野県千代村の青年層は、図書館を運営して、文献を用いた研究を模索した⁶。残念ながら、適切に問いを立てることも、それに基づく学問的討論と論述をも知らない彼らは、研究を進められず、以後国策である満蒙開拓に呑みこまれていく。けれども、土田が学び取れなかった学問的自己教育の文化の概要を自力で掴み、その具体化の一手手前にまで迫った彼らの到達点は、教育史上特筆されるべきであろう。

1 夫イードンはイングランド・ドーセット生まれのブリュッセル大学医学博士であり、王立ロンドン内科医協会発行免許を有する、王立イングランド外科医協会会員である。彼は1892～94年にtutor in Japanese provincial University（日本の地方にある高等教育機関で教え）、日清戦争時の95年にタイムズ紙通信員として日本陸軍に従い、同年～1912年には日本のほかアジアと英国の各地で医業に従事した（以上、*Who's Who 1940*, p2471）。

イードンはこの間1896～99年に長崎居留地に住んだ。彼は自分が無神論者だと公言し、また97年にはヴィクトリア女王在位60周年の祝い方を話し合う英国人の会合中に、ピクニックや晩餐会等の案が出されるなか、記念事業として国籍に関係なく救済活動を行う慈善組織創設を突然提案するなど、英国人社会では浮き上がった存在であり、医師としても、居留地での存在感を米国人医師に奪われていた。一方、ナガサキ・ホテル取締役としては、経営に打ち込んだ。

しかし1899年7月16日の居留地廃止直前に、イードンは突然役を辞任する。他の取締役と違い理由は明らかにされず、本人は医師でありながら退去を告げる英字紙上広告もしないまま、長崎から姿を消す。退去理由は不明であるが、そこに日本官憲の権力が及ぶ直前であったため、それ以後も同地にいと困る事情があったものと推測せざるを得ない（以上、岡本 2007）。彼がその後英国に帰ったことは、標題紙に「ブリュッセル大学医学博士M・イードン・ポールにより独語第3版から翻訳され、英米および国際的な学術用語使用に改められた」と記された『学生と外科医のための人間解剖学図解』（Toldt 1903）が、イードンの長崎退去から4年後にロンドンで出版されたことからわかる。その後、彼は1907～19年にはILP（独立労働党）に属し、このうち1912～14年はフランス社会党に勤務している。

妻シーダーはドイツで音楽を学び歌手手となった。彼女は1912～19年にILPに属し、このうち17～19年には、第2インターナショナル内団体である「社会主義者と労働団体の女性国際会議」英国支部

で書記を務めた。

この間の、遅くとも1918年にイードンはシーダーと再婚したとみられ、夫妻はグレートブリテン共産党（1920-91）に初期から参加した（以上、*The Labour Who's Who 1927*, p.165）。

- 2 上記self-educationの訳である「自己教育」と語感が似るが、あくまで知を拓くところに重点を置くので、「学問的」を略してこの語を用いることはない。
- 3 「偏向」に関する夫妻の説明を見よう。「ブルジョア教育——パブリック・スクール、プライヴェート・スクール、および大学での『上流階級』教育と、公立学校での『下層階級』教育——が、現存秩序の維持を促進するという定まった目的を有するのと同じく、独立労働者階級教育 [=プロレットカルト] はその秩序を打ち壊すという定まった目的を有する。どちらのタイプの教育も偏向しているのだ。ここにおいて両者間の唯一異なる点は、ブルジョア教育は偏向しているという意識が少なく、まったく階級闘争を超越したところにあつて純粋に偏っていないと主張することが多いのに対し、独立労働者階級教育は、自らが公平であり、かつ偏向していると宣言する点である」(Paul 1921, p.20)。
- 4 「これまで常に、しかもすべての階級のあいだで、文化を進歩させたいという欲望と、高度な文化を楽しむ能力をもつことは、人類のほんの一握りの人だけに限られてきた。文明化された人類においては、たいていの成人は余暇を遊びとスポーツ、そしてその他の形態の偽文化に費やす。これはブルジョアジーのみならず、プロレタリアートにおいても同じである。組織的労働が大量に行われるようになったことにより、骨折し仕事が減少しても、その成果は、たった一握りの人々によってしか、文化的な目的に使われることがない。プロレットカルトの本質的な要素とは何か。それは、身体の休養と精神の回復のために本当に必要であることがらを除いては、娯楽と偽文化は労働者の注意を階級戦争からそらせ、彼らの置かれた奴隷状態を固定化するための薬物の一部分だということを、労働者たちに悟らせる構想なのだ」(Paul 1921, pp.25-26)。
- 5 本研究は「民衆」と「労働者」の2語を併用している。「民衆」は、経済的状態や所属する経済的階級にかかわらず「無名の人々」の意であり（ただし本注が指す「下層民衆」の語は、民衆のうち下層の者を指す）、そのなかには労働者階級の大多数のほか、社会の底辺層にいる町工場主等も含まれる。さらには日本の自由大学受講者のように比較的裕福な人々も、山越のような指導者でなければ含まれる。「労働者」は、厳密に資本主義経済のなかで労働者階級に属する者を指す。
- 6 長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編（1960）は、「伊那の地には戦前に民主的な青年運動のかがやかしい歴史があったのだ、ということを、私たちは幼いときから折りにふれ父祖、先輩から語りきかされていた」としながらも、それが文字化されていなかったことが、同郡の青年運動史書をまとめた理由だと述べる（「序」、頁表記なし）。かく地道な努力が、地域や教育の特色を後世に脈々と伝えていくのだということを本研究は再認識し、敬意を表するものである。

【引用・参考文献】

- 石井敦編（1981）『個人別図書館論選集 佐野友三郎』日本図書館協会。
- 石井民司（1907）『中村正直伝』成功雜誌社。
- 岡本洋之（2007）「多弁の異端児、黙して去る」『동북아 문화연구（東北亜文化研究）』第12集、동북아시아 문화학회（東北アジア文化学会）、pp.487-498。
- 上木敏郎（1982）『土田杏村と自由大学運動』誠文堂新光社。
- 渋谷定輔（1991）「土田杏村と私」上木敏郎編著『土田杏村とその時代』新穂村教育委員会、pp.6-9。

- 清水米男編 (1934) 『千代青年会々史』 同青年会。
- 楯章 (1929) 「自由大学とは何か」『伊那自由大学』 第1号、自由大学会 [長野県下伊那郡鼎村]、飯田市立図書館蔵、pp.20-23。
- 土田杏村 (1920) 『靈魂の彼岸』 聚英閣。
- (1924) 『教育の革命時代』 中文館書店。
- (1935a) 「彼の人達」『土田杏村全集第十四卷 隨筆隨想』 第一書房、pp.63-73。
- (1935b) 「宗教論」『土田杏村全集第五卷 宗教と道德』 同社、pp.9-165。
- (1935c) 「人間論」『土田杏村全集第一卷 人生と哲学』 同社、pp.131-245。
- (1996) 「小木に居て」渡辺光弥編著『土田杏村と新潟新聞』 編著者発行、pp.141-152。
- 土田隆 (1991) 「杏村の思ひ出」上木編著前掲書、pp.113-116。
- 土井貴子 (2013) 「アルバート・マンスブリッジの大学成人教育実践」『比治山大学短期大学部紀要』 第48号、pp.17-28。
- 中野光 (1990) 『大正デモクラシーと教育』 新評論。
- 長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編 (1960) 『下伊那青年運動史』 国土社。
- 西尾実他編 (1986) 『岩波国語辞典』 岩波書店。
- 羽生三七他 (1979) 「座談会」『自由大学研究別冊一』 自由大学研究会、pp.16-46。
- 松塚俊三 (2006) 「独学の文化」松塚／安原義仁編『国家・共同体・教師の戦略』 昭和堂、pp.269-290。
- 山口和宏 (2004) 『土田杏村の近代』 ぺりかん社。
- 山野晴雄 (1981) 「自由大学運動年譜」自由大学研究会『自由大学運動60周年記念誌』 同会、pp.106-139。
- 編著 (1973) 『伊那自由大学関係書簡 (横田家所蔵)』 自由大学研究会、飯田市立図書館蔵。

*

- Ayers, David. (2018). *Modernism, internationalism and the Russian revolution*. Edinburgh : Edinburgh University Press.
- Beaton, Winifred. (1918). "The tutorial class movement". Cole, G. D. H., et al. (Eds.). *The W.E.A. education year book 1918*, London : The Workers' Educational Association, pp.253-259.
- Brown, Samuel. (1856). *Some account of itinerating libraries and their founder*. Edinburgh : Published by the author.
- Cole, G. D. H. (1918). "Trade unionism and education". Cole, G. D. H., et al. (Eds.), *op. cit.*, pp.370-373.
- Paul, Eden & Cedar. (1921). *Proletcult (Proletarian culture)*. London : Leonard Parsons.
- Rose, Jonathan. (2010). *The intellectual life of the British working classes*. New Haven and London : Yale University Press.
- Scruton, N. (1918). "The university tutorial class". Cole, G.D.H., et al. (Eds.), *op. cit.*, p.262.
- The labour who's who 1927*. (1927). London : The Labour Publishing Company. 神戸大学蔵。
- Toldt, Carl; Paul, M. Eden (Tr.). (1903). *An atlas of human anatomy for students and physicians*. London : Rebman.
- Who's who 1940*. (1940). London : Adam and Charles Black.

[付記] 本研究は、JSPS科学研究費補助金 (18K02376) の助成を受けた。